

21世紀の森と広場 おうちパーク

意外と知らない クマバチのこと

自然解説員
澤田 勝生

クマバチは正式にはキムネクマバチと言います。クマバチは花に来ては蜜や花粉を集めて食べるハナバチというハチのグループに属します。実は日本にはクマバチの仲間が何種類もいます。殆どは沖縄にいるため本州に住む私たちが目にするクマバチはキムネクマバチだけなので、クマバチ＝キムネクマバチで特に問題ありません。クマバチはハチの中でもよく見る種で、他のハチと区別がしやすいこと・大きくて見やすいこと・危険性が非常に低いこと・年中見られること、以上の点でハチの観察入門にはとても適したハチになります。



蜜を吸うメスのクマバチ

＜クマバチへの誤解＞

クマバチはずんぐりむっくり大きい所が熊に似ていることからクマバチと言います。テディベアをイメージすると分かりやすいです。日本の一部ではスズメバチを大きいことからクマンバチやクマバチと言う地域があることや、クマバチ自体が体と羽音が大きいこともあり、その生態に反して危険だと誤解されがちなハチです。



指乗リクマバチ

クマバチは気性が穏やかで滅多に人を刺さないため、毒針を持つハチの中でも危険

性は非常に低いです。これは他のハナバチ類でもよく見られる性質で、慣れた

人になると指や手に乗せることも容易なくらいにはハナバチの仲間は大人しいハチです。ハチを手に乗せるなんてと思われるかもしれませんが、単にスズメバチの一部がハチの中でも殊更人に対して攻撃的なハチというだけで、ほとんどのハチはそんなに人を刺しませんし人に興味もありません。そもそも毒針を持たないハチなんてものが別に珍しいものでもないのです。世の中にはスズメバチを巣ごと飼育する酔狂な人もいますが、要は正しい知識を持って適切な付き合い方をすれば大事ないということです。

＜クマバチのオスは観察がしやすい＞

クマバチがハチの観察入門に適していることは先に述べましたが、中でも最大の理由が春から夏まで現れるオスの存在です。ハチの毒針は産卵管が進化したものというのは有名な話ですが、ハチのオスは産卵管なんて持ちようがないので同時に毒針も持ちません。このためハチのオスは掴んでも一



オスのクマバチ

切人を刺すことがなく、クマバチはオスメスの区別が容易なこともありハチの扱いに慣れる練習台として非常に優れています。クマバチのオスの見分け方は顔の中心が黄色いこととメスより目が大きいことです。また花の咲いている場所に縄張りを持ってその中を飛び回る習性があるため、空中の同じ辺りをグルグルしていたらだいたいオスです。これは蜜や花粉を集めに来るメスと繁殖するためで、動く物があるとメスが確認するために近づいて来るので捕まえるのも容易です。

縄張りにはドウダンツツジやエゴノキのようなハナバチの好む垂れ下がった花や、トケイソウやフジのようなクマバチ媒花の周りにあることが多いです。ハナバチを探すときは花を探すのが一番早いので、観察する際は花の多く咲いている開けた場所を探しましょう。

＜他のハチとの見分け方＞

クマバチと間違われるハチにマルハナバチがあります。マルハナバチもクマバチ同様ハナバチの中では大型なので間違いやすいですが、お腹が毛でモフモフなのがマルハナバチの特徴で、クマバチのお腹はそんなに毛が生えてません。

クマバチは胸が黄色くてお腹は真っ黒で、マルハナバチはお腹の一部や全体が黄色かったり白かったりするので実は慣れれば見分けるのは簡単だったりします。ミツバチは大きさが全然違いますしお腹に縞模様があったらまずクマバチではないのでこちらも見分けることは簡単です。



トラマルハナバチ



セイヨウミツバチ

＜クマバチの農業利用＞

ミツバチやマルハナバチが農業でよく受粉に使われることは有名な話です。日本だとハウス栽培のイチゴ・キュウリやメロンのようなウリ科・トマトやナスなどのナス科で多く、リンゴだとマメコバチというまた別のハチで受粉が行われています。ハチに受粉させた方が人が受粉させるよりずっと楽なのもありますが、ハチが受粉したほうが美味しくて栄養があり形が良いのも大きいです。海外だとコーヒーやナッツもハチの受粉で作られていて、おおよそその実や種子を食べるようなものはだいたいハチが関わっています。そんな中で、実はクマバチがパッションフルーツの受粉に貢献していることはあまり知られていません。

パッションフルーツはクダモノトケイソウの果実で、トケイソウの仲間はクマバチのような大型のハチでないと受粉が出来ません。おしべとめしべが花弁から高く離れていて付け根に蜜腺があるのですが、大きなハチでないと蜜を舐める時に背中に花粉を付けて運んでもらうことができないからです。パッションフルーツは千葉県を含めて日本全国で栽培されていますが、殆どが温室栽培でミツバチも使えないため人工授粉に頼っています。そんな中野外で栽培しているパッションフルーツではクマバチがよく受粉してくれるようで、家庭で育てているパッションフルーツでもクマバチが受粉することが多いそうです。海外ではパッションフルーツの生産にクマバチが使われていますが、研究が進めば日本でもクマバチを使ったパッションフルーツ栽培が行われるようになる

かもしれません。

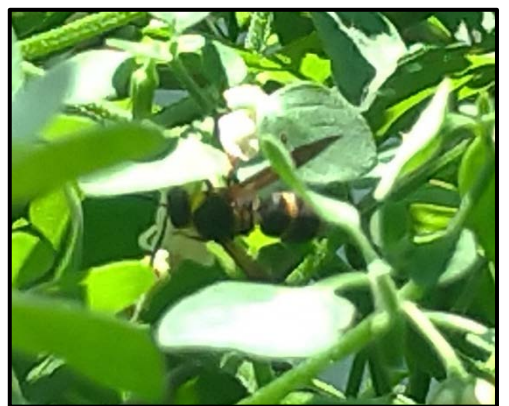


トケイソウの花

＜クマバチの盗蜜＞

クマバチは英語でカーペンタービーと呼ばれます。これは木の枝に穴を掘って巣を作るところを大工に見立てたものですが、このようにクマバチは巣穴を掘るための強靱なアゴを持ちます。またハナバチは舌に蜜を絡ませて舐め取るのですが、クマバチはこの舌が少しばかり短いです。その上顔が大きいものですから花によっては頭が上手く入りません。これらのことからクマバチは上手く蜜を吸えない花では穴を開けて蜜だけを吸い取る盗蜜と呼ばれる行動をします。この行動はブルーベリーなどのツツジ科の花冠の長い品種でよく見られます。

当然受粉には一切貢献しないため花からしたら嬉しくない行動ですが、どうも一部の虫にとっては違うようです。アシナガバチのような肉食性のハチは獲物をかみ砕く形の口をしているため、花の蜜が好きな割には舐めるのは苦手です。ヤブカラシのように蜜腺が露出していれば話は別ですが、通常彼らが花の蜜を吸うことは出来ません。しかしクマバチが盗蜜のために開けた穴は蜜に口が届くようで、口を突っ込んでクマバチの食べ残しを漁っている様子が観察されました。花からしたら踏んだり蹴ったりですが、こういう形の関係もハチにはあるんだなと感心してしまいます。



盗蜜で開いた穴から蜜を舐める

アシナガバチ

梅雨といえばカエルですね！

自然解説員 神谷耀生

ここ千葉県には外来種を除いて 10 種類のカエルが生息しています！その中でも私が特に気に入っているカエル、アズマヒキガエルについて紹介していきます！この公園にもくらしていますよ！



のっそりもったり動くのがなんともかわいく、見ていていやされます。飼育ケースの中に水を張った容器を置いておくとまるで温泉につかる人間のように中でくつろいだり、たまに発する「クッククッ」というかぼそい鳴き声が意外とかわいらしかったり、エサの虫をなかなか上手く捕まえられなかったりと、じっさいに飼ってみると見た目のいかつさからは考えられないほど愛らしいカエルです。個人的には日本にいる 50 種類近いカエルたちの中で一番好きです。

アズマヒキガエルはコブシの花がさきはじめる早春に冬眠からさめて水辺に集まり産卵します。メスはオスに比べて数が少ないので、池はメスを取り合うオスたちでおしあいへしあいの大さわぎ。これが「かわず合戦」と呼ばれる現象です。産卵が終わると、アズマヒキガエルたちは再び冬眠にもどり、葉桜のころめざめ、活動をはじめます。

アカガエルはジャンプが得意。アオガエルはよじ登るのが得意。しかしヒキガエルはジャンプするのもよじ登るのも得意ではなく、ひたすら歩き回る不器用なカエルです。でも、そんなアズマヒキガエルにも強みはあります。

一つは、他のカエルと比べてかわきに強く、ふだんは水辺からはなれてくらせること。ほとんどのカエルはかわきに弱く、水辺からあまり離れずにくらしていますが、アズマヒキガエルはふだんは公園の植え込みや森の中などでくらしています。生き物がくらせる水辺の少ない場所でも、アズマヒキガエルならくらせる可能性があるのです。

二つめは、サイズが大きかったりいやなにおいを出すような食べにくい虫もばくばく食べる。酸っぱい液体を出すアリをたくさん食べているアズマヒキガエルを見たことがありますし、くさいにおいを出すゴミムシやシテムシ、大きなカマキリなども食べてしまうことがあるようです。

三つめは、体が大きく、毒があるので、ほかの動物に食べられにくいこと。アズマヒキガエルは成長すると大人の手のひらにおさまりきらないくらいまで大きくなり、また、強くつつくと耳のあたりから白い毒液をにじませることがあります。おまけに食べると嫌なにおいがするのか、アズマヒキガエルを食べる動物はヤマカガシというヘビや外来種のアライグマなどに限られています。

そんな強みがあってか、都会の真ん中でも産卵する池があればなんとか生き残っている場合もありますが、道路で車にひき殺されたり、池が干上がったたりするなどして、千葉県では絶滅危惧種に指定されています。道路開発のみなおしや、産卵期の車の通行制限、また冬眠場所となる池の周りの森を守ることなどが必要です。

その他、千葉県にはツチガエル、カジカガエル、ニホンアマガエル、ニホンアカガエル、タゴガエル、ヤマアカガエルトウキョウダルマガエル、モリアオガエル、シュレーゲルアオガエルが生息しており、それぞれ魅力的な姿を私たちに見せてくれます。自然開発や外来種問題(千葉県にはウシガエル、トノサマガエル、ヌマガエル、アフリカツメガエルが移入しています)などにより絶滅の危機にあるものばかりですが、今後も消えずにずっとくらしつづけてほしいものです。

アオサギは大食漢！！

この公園で見られる鳥の中で一番大きな鳥、それがアオサギ。
松戸市で「水辺の鳥」として制定されているシラサギの中で
一番大きいのはダイサギ。

ダイサギ	体長89cm、	翼長140cm、	体重約1.2kg
アオサギ	体長93cm、	翼長165cm、	体重約1.5kg



千駄堀池などで見た事があるよね！

ダイサギと比べて、首が太くてやや短い。

この喉の太さ、短さの差のためか．．．

明らかにダイサギより大きな獲物を捕食する
シーンを見る事が多い。

このアオサギくん、すごい大食いで

動く物なら何でも食べてしまう．．．感じ。

魚を食べることが多いが、他にカエル、ヘビ、貝、
ザリガニ、昆虫、ネズミ、鳥、そして鳥のヒナなど、
全ての生き物が餌となってしまうんだ。



これは大きなウシガエルを
捕まえて咥え、飲み込むまでの
ちょっと残酷に見えるシーンだけど

自然界ではほとんどの生き物が
喰うか食われるか。．．と言った
ギリギリの死と隣り合わせの日々を、
懸命に生きているんだ。



- 鳥は歯が無いから獲物をかみ砕く事が出来ないで、
飲み込んでしまうんだ。
- 一度に10cm強の魚を、何と7匹．．も連続して
食べた観察例もあるよ。

40cm近い大きな魚も捕まえて飲み込むけれど、
これらは500g以上の重さがあるんだ。

- 普通はクチバシで挟んで捕まえるけれど、
大きな魚などはクチバシで刺して捕まえるんだ。

自分の^{じぶん}体重^{たいじゅう}の 1/3 もの^{えもの}獲物^のを飲み込んで、
大丈夫^{だいじょうぶ}なのかなーと心配^{しんぱい}するけど

鳥^{とり}は飛^とぶ^{ため}に体重^{たいじゅう}を軽^{かる}くする^{ひつよう}必要^あが有^あるから、
消化^{しょうか}時間^{じかん}が短^{みじか}く食^たべたものを体^{からだ}から、早^{はや}く
排泄^{はいせつ}する事^{こと}が出来^{でき}るんだ。

アオサギ^{だいひょうてき}の代表的な
ポーズと言^いえばこれ。

日光浴^{にっこうよく}をしている様^{よう}だが、
他^{ほか}のサギでこんなポーズを
見^みせて呉^くれる鳥^{とり}はいない。

気分^{きぶん}がいいんだ
ろうね、きっと。



カワウも杭^{くい}の上^{うへ}で羽^{はね}を拡^{ひろ}げたポーズを
見^みせて呉^くれるが、これ^{みず}は水^{もぐ}に潜^{ひそ}って
濡^ぬれた羽^{はね}を乾^{かわ}かすために
広^{ひろ}げているだけ。

* 写真は「我孫子野鳥を守る会」より提供頂きました。

公園で見られる親とはちょっと違う幼鳥たち

初夏は孵ったヒナが巣立って、盛んに鳴いて親に餌をねだる姿がよく見られます。幼鳥たちは親鳥とはちょっと違った姿や鳴き声であり、特に聞く事の少ない声だけで種を同定する事はとても難しい時期です。



6月は**ムクドリ**の季節。
もともと群れる習性があり、
幼鳥と親たちが入り混じっ
何十羽ものムクドリが、うるさいほど
鳴きながら飛び交う姿が見られる。

幼鳥は淡褐色で、メリハリがない。
ほっぺの白色部分が小さく、嘴も短い。

その美しさで人気No.1の **カワセミ**。
この公園に来て、カワセミが見られただけで
十分に満足．．．という来園者も多い。

- さすがにカワセミ、幼鳥といえど
それなりに美しいが、やはり親と比べると
くすんだ感じで鮮やかさには欠ける。
- 体や足も黒っぽく、嘴も短く先端が白い。



どこでもいるハクセキレイと違い、
日本固有種の**セグロセキレイ**は
水辺の環境が好きで、公園では
千駄堀池周辺で見られる。

- セグロセキレイはほほが黒い．．
のが特徴であるが、この幼鳥にもはっきりと
色は薄い顔中が黒い事で判別できる。

注；ハクセキレイめは夏背中が黒くなるので、背中だけ見てセグロセキレイとすると
間違える事があるので、しっかりと顔までみて判別すること。



声を聞いただけで名前が出て来る **ウグイス**。
しかし、その姿をじっくりと見た．．．という人は
意外と少なく、この公園でも声は良く聞かれるが
やはり姿を見せてくれない。 残～念！！

- 幼鳥の特徴は嘴の基部が黄色く、顔から
体下面も黄色味をおびる。
- 尾羽と翼も短く見える。

梅雨空にスーイ、スーイと飛び回っている **ツバメ**。

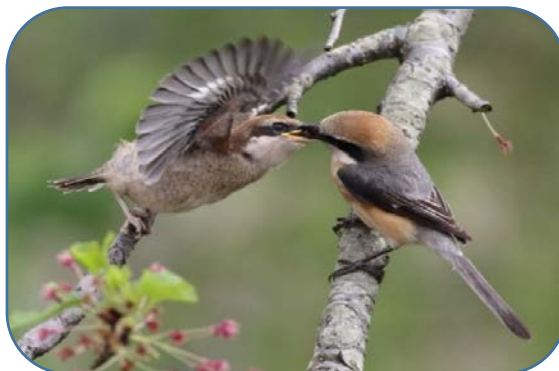
今年は残念ながら、公園内での繁殖は失敗に
終わってしまった様だが．．．。



- 幼鳥は、ツバメの特徴でもある
喉の赤味がうすく、自慢の尾羽も伸びきっていない。
- 全体にくすんだ感じで、嘴の白っぽさが目立つ。

小さな猛禽．．．を想わせる **モズ**。

秋には「高鳴き」を聞かせてくれたり、
初冬には「はやにえ」を楽しませて
くれたりと、かなり目立つ鳥ではあるが
繁殖時期が早く、写真の様なシーンは
4月頃に見られる。



- 幼鳥は嘴が黄色く、翼や尾羽もまだ短い。



初夏はカラスもまた幼鳥が見られる季節。
写真は **ハシボソガラス**。

- 幼鳥は群れで行動し、その遊びを通して
一人前になっていく。
- 嘴がまだ伸びきっていない。

★初夏にはかなり目にする幼鳥たちだが、彼らが無事に年を越し成鳥になれる確率は
我々が想像する以上に低く、天敵の多い過酷な環境に暮らしている。

夏のミクロなモンスターたち

自然解説員 神谷耀生

ライオンやオオカミやトラやホッキョクグマだけでなく、私たちの身近にも小さな猛獣(もうじゅう)はひそんでいます。ぜひ彼らを探して、その生きざまをのぞいてみてください。



ミイデラゴミムシ(甲虫目ホソクビゴミムシ科) 下方向に強くけり出すことのできる仕組みの脚ですばやく走り、大顎(おおあご)でほかの小さな虫を捕食できるだけでなく、100℃にも達する高温の毒ガスを放出できる。派手な噴射音(ふんしゃおん)を立てながら、自分の何十倍も大きな天敵も撃退(げきたい)する様子はさながら昆虫界のスキャンク。幼虫はケラの卵しか食べないという極めつけの偏食家(へんしょくか)で、生息には良好な湿地環境(しっちかんきょう)が必要。おとなり東京都では絶滅危惧種(ぜつめつきぐしゅ)。

アオヤンマ(トンボ目ヤンマ科) クモの巣に突撃(とつげき)して主をかつさう強引な狩人。身体にからみついたクモの糸は歴戦の勇者の証(あかし)。幼虫はアシやマコモなど、背の高い水草の繁茂(はんも)する平地の池沼の中に住むが、そうした環境は宅地開発されやすいため、全国各地で絶滅危惧種に指定されている。

ヤブキリ(バッタ目キリギリス科) 自分より大きなセミもトゲだらけの脚でかかえこんで制圧(せいあつ)してしまう寝技の使い手。獲物(えもの)をかみくだく大顎(おおあご)は恐ろしいほどの破壊力を持つ、バッタ界きっての勇猛なファイター。幼虫時代は草地で花粉や草の種などを食べて過ごし、成虫はやぶや森などでくらす。

オオスズメバチ(ハチ目スズメバチ科) 攻撃力、防御力、体力、スピードすべて申し分ない昆虫界のリーサルウェポン。毒針の威力(いりよく)はよく知られているが、毒液を飛ばしたり大顎(おおあご)で肉を削ぎ取ったりと恐ろしい技をいくつも持つ最恐のギャングである。反面、害虫をたくさんハンティングすることで生態系のバランスを整えている。

シオヤアブ(ハエ目ムシヒキアブ科) 飛び獲物(えもの)を背後からロックオンし、鋭い口器を使って急所の神経節(しんけいせつ)を切断して瞬殺(しゅんさつ)する凄腕(すごうで)のアサシン。狙われたら最後、大きなスズメバチやトンボでさえも逃れられない。

コガネグモ(クモ目コガネグモ科) 大きなバッタを糸でぐるぐる巻きにして捕まえてしまうパワフルなハンター。巣をよく観察すると別種の小さなクモがこっそり住み着いていることも。農薬には敏感(びんかん)で、一時期は各地で姿を消した。

アオズムカデ(オオムカデ目オオムカデ科) 目は悪いが反射神経(はんしゃしんけい)はするどい。獲物をたった 10 秒ほどでおとなしくさせる驚異(きょうい)の毒顎(どくあご)を持つ。意外とスピードも速く、身体もタフで打たれ強い。

オオゲジ(ゲジ目ゲジ科) ムカデの仲間だが、目がよくジャンプして獲物(えもの)をとらえたり、まるでタコのように足先を巻き付けてからめとったりと器用なテクニックを使いこなす。人間を襲(おそ)わない優秀な害虫ハンターでもあるのに、見た目が気味悪がられて駆除(くじょ)されることも。

湿地の昆虫

自然解説員

～園内の水生カメムシ類～

澤田 勝生

夏になり暑くなると水辺で涼をとることも増えてくるかと思います。21世紀の森と広場では園内の湿地の各所に水生昆虫が生息しており、水辺に寄れば目にすることもままあるでしょう。そんな水生昆虫の中でも目にする事の多い水生カメムシ類を、簡単にですが紹介します。

園内で見られる水生カメムシ類の中で最大のものがコオイムシになります。大きさは2cmほどですが、これでも水生昆虫の中では中型の部類に入ります。平野部の水域に生息するため人の活動の影響を直に受け、数の減った虫です。

前足が鎌状になっていて獲物を押さえ込んで口針を刺して体液を吸います。この食べ方は水生カメムシ類では一般的なものです。餌は生きた虫

や小魚など色々食べますが、巻き貝の仲間も食べるため餌に困りにくく他の水生昆虫が生活できない浅い場所でも暮らすことが出来ます。それでも数が減っているわけですが。

最大の特徴はオスが卵を背負うことです。卵を保護するのはカメムシの仲間ではよく見られる行動ですが、背負うとなるとやはりコオイムシくらいではないでしょうか。背中で卵が孵化するまでオスの世話は続き、孵化し終わると水草などにこすりつけて卵の残骸を剥がします。ただあくまで世話をするのは孵化するまでで、生まれた後はもう世話をする事も無く、親が自分の子を共食いすることも珍しくはありません。

宅地化や埋め立て、周辺環境の開発や悪化などで彼らの生息地になる平野の湿地もかなり減りましたし、田んぼも栽培方法の変化で生き物が棲むのに適したものは随分と減りました。21世紀の森と広場の自然生態園はそんな中でコオイムシが暮らす貴重な湿地です。これからも彼らが生きていけるよう大事にして見守っていききたいものです。



コオイムシのオス
自然生態園で見られる

チビミズムシはミズムシという水生カメムシのグループに属する 2mm ほどの小さな虫です。ため池などに割といたりして珍しい虫ではないのですが、如何せんマイナーな虫で研究もあまりされておらず生態に関してはよく分かっていません。主にプランクトンに口針を刺して汁を吸っているそうですが、小魚の死骸に群がっているのも見かけます。



クロチビミズムシ
野草園で見られる

最大の特徴は体の一部をこすって鳴き声を出すことで、体の大きさと発する音量の比では生物界でも有数の大きさになります。ただ音のほとんどは水に吸収されて無くなってしまい、実際に聞くには耳を澄まさないといけないかも知れません。

コマツモムシはマツモムシの一種で、名前の通り小さく約 6mm とマツモムシの半分ほどの大きさです。マツモムシの仲間は背泳ぎをするという特徴があり、背泳ぎをしていなかったらマツモムシでなくよく似たミズムシの仲間になります。後ろ足をオールのようにして泳ぎ、他の足はミジンコやアカムシなどの獲物を捕獲するために使います。



コマツモムシのペア
野草園で見られる

生息地では群れていることが多いのですが、運悪くはぐれの 1 ペアしか撮れませんでした。おそらく昼間なのでほとんどが水草の茂みに隠れていたのでしょう。

このほかにも園内には多数のアメンボなどの水生カメムシ類が生息しています。著作権の関係で写真を撮れた虫しか紹介できませんでしたが、興味のある方はパークセンターだよりの第 134 号にアメンボについて詳しく紹介しているのでそちらもご覧下さい。

ちなみに 21 世紀の森と広場ではアメリカザリガニを除いて生き物の採集持ち出しは禁止していますので、水生カメムシ類についても見るだけに留めて採集はしないでください。
また獲ったザリガニは園内含めて決して他の水場に逃がさないでください。

21 世紀の森と広場 夏の虫たち ver.1

自然解説員 神谷耀生

7月上旬に公園で見られた虫を紹介していきます。



クロコノマチョウ

翅(はね)を閉じると枯れ葉そっくりな、やや大きな蝶。初めて見たときは「沖縄県指定天然記念物のコノハチョウがなぜ関東に……???'」と思ってしまったのではないしょ。成虫は樹液や熟した果実の汁を吸い、幼虫はススキやジュズダマなどの植物の葉っぱを食べます。

ミツツノコノハガエルしかりエダハヘラオヤモリしかり、枯れ葉擬態(ぎたい)の生き物がかなり好きなので、個人的には出会うと特に嬉しい気持ちになれる生き物です。

基本的に翅を閉じた姿勢で隠れたりエサを食べたりし、驚くと素早く飛び立ってしまうので、翅の表側はなかなか見る機会がありません。

ところでこの写真、よく見てほしいのですが、脚が2対しかないように見えませんか?? 昆虫の脚は3対が基本ですが、実はクロコノマチョウを含むタテハチョウの仲間は前の1対が退化して、外見上は2対に見えるのです。同じような例で言えば、昆虫の翅は2対が基本ですがハエの仲間は1対が退化して小さな突起になり、2枚の翅で器用に飛び回ります。



コムラサキ

水辺のヤナギの葉っぱを食べるいもむし。幼虫時代ですらほわほわした毛と背中の子いさな突起、短い脚に角の生えた顔が非常に愛らしいのですが、成虫になると一見茶色いけれどもみる角度によってはキラキラと紫色に光り輝く、奥深いみどころのある蝶になります。ヘルマン・ヘッセ

の「少年の日の思い出」に登場することでも知られています。



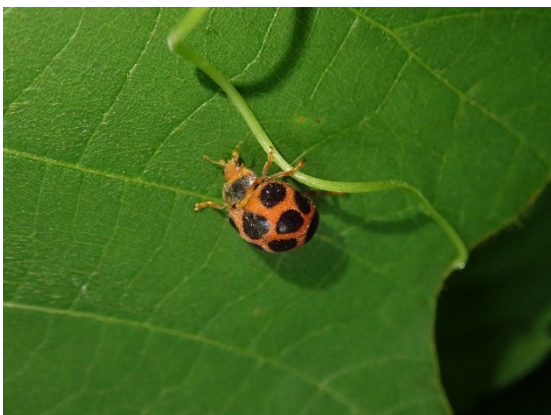
シロテシクロマイコガ

ピンと伸ばしたふさふさの脚(あし)のおかげで初見だとなんの虫かわからないユニークな姿の蛾。前衛的(ぜんえいてき)すぎて、なにかに擬態(ぎたい)しているのかもしれませんがなにに擬態しているのかさっぱりわかりません。幼虫はマタタビの果実を食べるらしいので実質ねこちゃんですね。



ウリハムシ

羽虫ではなく葉虫。カラスウリなどの葉っぱを食べる甲虫です。植物は動物にかじられた刺激を感じると、それ以上食べられないために傷口に大量の苦み成分を送り込みますが、ハムシは白く円を描くように葉をかじってから円の内側だけを食べます。そうすることで、植物のセキュリティシステムを無効化(むこうか)して美味しく葉っぱを頂いてしまうという策略家(さくりやくか)なのです。かわいい顔してなかなかやりますね。



トホシテントウ

ナナホシテントウよりも星が3つ多く、体の表面はよりふわふわした、ぬいぐるみみたいなテントウムシです。幼虫はカラスウリなどの葉っぱを食べますが、全身に枝分かれしたトゲが生えています。でもさわってもふにゃふにゃでまったく痛くもかゆくもありません。見かけだけ強がっているのがとてもかわいいのですが、虫の天敵の鳥は主に目で獲物を探すので、案外ハッターリも有効な戦略なのかもしれませんね。



ラミーカミキリ

100 年以上前に日本にやってきたカミキリムシ。触るとチクチクと痛い植物、イラクサの仲間を食べます。小柄ながらなかなか美しく目を引く虫ですが、わりと警戒心(けいかいしん)が強めで、近寄るとすぐに飛んでいってしまうことも。背中のもようはどなたかが「スーツを着たパンダ」とおっしゃるのを聞いて以来、そうとしか見えないです(笑)



クサグモ

園内の各所の生け垣などに棚網(たなあみ)と呼ばれる、天蓋つきベッドのような形の網を張っているクモです。これが雨露に晒されると美しいこと美しいこと。ふだんは網の奥のトンネル状の住居部分にひそんでいますが、網に葉っぱなどを落とすと「何事??」とでも言わんばかりに走り寄ってきますかわいい。



ササグモ

これまたクサグモと紛らわしい名前ですがこちらは網を張らずに歩き回って獲物を探すクモ。ハエトリグモと間違われることもあります。夏に草むらや花壇などで獲物を待ち伏せている姿をよく目にする割に認知度が低いクモです。身体の割に脚は細いですがよく走り、跳ね、獲物(えもの)を捕まえて葉っぱの裏にぶらさがっている元気な姿を目にします。つぶらな目と木の実みたいなお腹の形がかわいくて、なかなかお気に入りです。



サツマノミダマシ

森林のへりなどに、主に夜間に網を張るクモです。ころっとした体型ときれいな黄緑色がとても愛らしく、ブローチにしたいと思います。名前の由来は「さつまの実」とも呼ばれるハゼノキの実に似ていることから名付けられましたが、色の雰囲気以外そんなに似ているかな……というのが私の正直な感想です。せっかくかわいいんだからもっと覚えやすい名前ならもっとみんなにちやほやされるのに……とクモびいきの私にはそう思えてしまいます。

発行：2020年7月 21世紀の森と広場パークセンター